

# 辣腕上司の極上包囲網

～失恋したての部下は、  
一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。～

---

当麻咲来

*Sakura Touma*



## 目次

辣腕上司の極上包囲網  
／失恋したての部下は、  
一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。  
美味しくて蕩けるように甘い蜜月を

書き下ろし番外編

モーニングシックネス・ラプソディ

辣腕上司の極上包囲網

ゞ失恋したての部下は、

一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。

ゞ

## プロローグ

「和泉さん、試作品のアンケート結果、どうなっている?」

席で別の仕事をしていた和泉紗那は書類を持って、商品企画室長の渡辺隆史の席に向かう。

「データ、先ほどまとめ終わりました。確認いただいて問題なければ、週明けの会議の

資料は今日中に準備します」

そう言って報告書を渡すと、隆史はメールを打っていた手を止める。ちらりと紗那の服装を見て、何か言いたそうに一瞬眉根を寄せた。

(な、なに?)

思わず身構えてしまう。今日は金曜日でこのあとデータの予定があるので、いつもより少しだけ華やかなワンピースを身につけているのだ。

だが当然ながら紗那の服装について何か言われることはなく、隆史は紗那が用意した資料に目を通す。紗那は祈るような思いで、書類のチェックをする隆史の表情を観察し

ている。

(室長、お願いだから、今日だけはややこしい指摘をしないでっ)

紗那が勤めているのはミニ冷凍食品という食品メーカーだ。両親共働きの家で育ち、幼い頃から、妹と弟のお腹が空けば冷凍食品で自分も含め三人分のお腹を満たすという生活をしていた。だから紗那は、子供でも安全・簡単に美味しい食事を作る手助けをしたいという夢を持つてミニ冷凍食品に就職した。

念願叶つて三年前から商品企画室で勤務している。隆史は若くしてその商品企画室の室長になつた辣腕上司で、チエックは厳しい。

「和泉さん。ちょっとといいかな。ここ、数字を入れ替わっているようなので確認して修正を。あとこつちは数値を可視化したほうが説得力が増すので、グラフを挿入していく下さい。ああ……過年度での数値の変移を確認するために、過去のデータの追加も必要ですぬ」

短時間で書類にすべて目を通したらしい。他にもいくつか細かい点を指摘されたが、思ったほどややこしい修正がなくて、ホッとした紗那はペコリと頭を下げる。

(この程度で終わって良かつた……)

隆史は、親会社であるミナミ食品から冷凍食品部門の強化のため、子会社であるミナミ冷凍食品に出向してきている。人当たりが良く穏やかだが、仕事が関わると非常にシ

ビアで、そのお眼鏡にかなわない書類は即刻笑き返されるし、企画書は微細でも穴があれば突つ込まれる。

隆史が商品企画室長になつた二年前には、まだ三十歳を超えたばかりという若さに、ベテラン社員を中心にあちこちから異論が出た。

だが最初に立ち上げた企画『贊沢チルド』シリーズは、冷凍食品ではなかなか実現できなかつた本格的な味と高級志向のラインナップが好評で、ネットの口コミから火がつき、マスクなどにも取り上げられる人気シリーズとなつた。

現在『贊沢チルド』シリーズはミナミ冷凍食品の看板商品となり、今まで棚がなかつた大手スーパーでデパートなどにも商品を納品できるようになつた。結果として隆史は実力で社内の批判を封殺した形だ。

もちろん紗那も上司として、隆史のこととは尊敬している。その分、彼の前ではミスがないように警戒して仕事をしているので、なんとかやりこなせてはいるが、後輩の金谷里穂などは、ことあるごとにミスを指摘されている。手に負えなくなるとすぐに紗那に泣きついてくるため、紗那是自分の仕事以外でも仕方なく残業をする羽目になつてはいる。

（まあ里穂ちゃんは書類作成とか、地味で面倒なことになると途端にいい加減だからな……）

だが妹弟がいる紗那是、甘え上手な里穂に懐かれると言わないと断れない。その調子で里穂は紗

那以外にも周りに甘えまくつているが、何故か隆史のことだけは毛嫌いしており、普段から『うるさいオッサン』呼ばわりしている。

（渡辺室長には、里穂ちゃんの『愛嬌でなんとか乗り切る』スタイルは通用しないっぽいからなあ……）

まあ入社二年目、二十代前半の里穂から見れば、十歳近く年上の隆史はオジサン枠なのかもしれない。けれど、二十八歳の紗那から見れば、隆史がオジサンと呼ばれるのは少し可哀想だと思う。というか、自分もあと二年で三十歳になるし、里穂のような子たちから、近いうちに『うるさいオバサン』などと呼ばれるようになるのかもしれない。

その前には結婚したいなあ、などと今日のデート相手の顔を思い浮かべながら、紗那は書類作成しているらしい隆史の様子を見る。

隆史は一般的に見て、容貌が整っている。可愛い系の男性が好きな紗那からすると、クールでキリッとした顔立ちや、スッキリした目元はあまり好みではないものの、スタイルが良く、服装のセンスも良いし、鬼上司の顔を知らない企画室以外では、密かに『企画室のエース』に憧れている女性は多いようだ。

（ま、外面は良いもんねえ……）

里穂のやうな愛嬌の塊のやうな女子でも、対応が平等なのはきっと美点なのだと思う。戻された報告書をちらりと見る。グラフにするにはもう一度、データの見直しをしないといけないだろう。目の前の時計を見ると終業まであと二時間。

（まあ、ちょっと面倒ではあるけれど……）

就業時間中に書類を修正して隆史の了承を得て、週明けの会議に間に合わせなければ、紗那は小さく拳を握り、自分に気合いを入れる。

（よし頑張るぞ。今日は勇人と久々のデートだから残業は絶対にしないもんね！）

一人で頷くと、紗那はデータを保存しているパソコン画面を開いた。

\*\*\*

なんとか仕事を時間内に終わらせたものの、退勤際に隆史に声をかけられて、十分ほど遅れてしまった紗那は大慌てで喫茶店に飛び込む。

「ごめんね。会社を出る直前、ちょっと呼び止められちゃって……待った？」

田川勇人はそんな紗那を見上げて、複雑そうないつもと違う笑みを浮かべた。

よく待ち合わせに利用しているこの喫茶店はお互の会社の中間地点となるビルの地下にある。普段から客が多くなく、それでいてコーヒーが美味しくて、ウツディナイところ

イメージで統一された落ち着いた店内は、二人のお気に入りの場所だった。静かにかかるジャズの音楽を片耳で聞きつつ、紗那は遅れてしまったことをわびるように頭を下げた。

「……いやまあ、そんなに待ってないけどさ。……紗那は相変わらず忙しそうだね」

子犬のような可愛い顔立ちをしている勇人はそう言うと、不満げに鼻を鳴らす。付き合つて三年になる彼と今日は一月ぶりのデートだったのに、遅刻してしまった。

「ごめんなさい。金曜日だから、退社前に色々と声かけられちゃって。……勇人もこのところ忙しいみたいだつたし。……ところでお母さんの体調はどう？」

一年付き合った後に同棲するようになつて二年。一緒に生活していたから、お互い忙しくても顔を見ない日はなかつたのだけれど、勇人の母親の体調が悪いということで、ここ一ヶ月半ほど彼は東京近郊の実家から仕事に通つており、顔を見るのも久しぶりだ。だが看病のために実家からの通勤をしているわりに彼は元気そうに見えた。

「うん、まあ……大分良くなってきたんじゃないかな」

「そう。それは良かったね」

お互の両親に挨拶を済ませているため、彼の母とも面識がある。優しそうな彼の母の顔を思い出し、ホツとして紗那が笑みを浮かべる。だが勇人は唇を引き締めたまま、何も言葉を発しなかつた。

しばらくして店員がコーヒーを紗那の前に置いて立ち去ると、ようやく勇人は大きく

息を吸つて、それから決意を固めたように紗那の顔をまっすぐ見つめた。

「ずっと……話さなきや、つて思つたことがあつて」

普段の軽い口調と打つて変わつた真剣な声でそう告げる。

(もしかして……改めてプロポーズ、とか?)

紗那是彼の不在の間、同棲している部屋に戻る度<sup>たび</sup>、勇人がいない寂しさを感じ、彼の存在の大きさを再確認していたところだつた。だから勇人から、『話したいことがあつる』と今日呼び出された時、同棲して二年になつたことだし、具体的に結婚の話になるのではと思ひ込んでいた。

「お互忙しくて、このところすれ違ひばかりだつたからさ……」

勇人はそう言いながら視線を紗那の頭の後ろ側にある柱時計に向ける。

「……なあに、どうしたの?」

そわそわして緊張している様子の勇人を勇気づけるように微笑んで、紗那是話の先を促した。

「あ、紗那。——俺と別れてくれないか」

「……え?」

正式なプロポーズ待ちのつもりだつた……それなのに。

(ちょ、ちょっと待つて、今、この人なんて言つた? )

プロポーズを期待していた心と、別れてくれという彼の言葉のギャップに瞬間、紗那の脳の活動が完全に止まつてしまう。

(……今、別れてくれつて……言われたんだよね)

数刻の間があつて、ようやく紗那の脳に、彼の発言の意味が伝わつてくる。驚きのあまり呆然と勇人を見ていると、彼は口火を切つたことでホッとしたのか、続けざまに口を開いた。

「ここ一ヶ月、紗那と離れたら凄い気分が楽になつた。お前はいつも仕事最優先だし、一緒に住んでいてもあんまり家事もしてくれないしさ。俺、それがずっと嫌だつたんだよね。結局俺は、自分のことを最優先にしてくれるタイプの女が好きなんだつてよくわかつた。お前といふと、あれをしろ、これをしろとうるさくて自分の家の人に自由がないで疲れるんだよ」

(どういうこと? 家事つてほとんど私が一人でていたんだけど……)

彼の言つている意味がわからぬ。勇人がしていた家事なんて、せいぜい燃えるゴミの日に、マンションの集積場にゴミを出すのと、頼まれた買い物を帰りがけにするくらいだつたはず。

「……じゃあそういうことで、今の部屋、再来月の更新前に契約終了にしたいから、来月いっぱいには荷物を処分してほしい」

「ちょ、ちょっと待つてよ」

慌てて彼の手を掴もうと手を伸ばす。だが、彼はその手を避けるようにして、そのまま席を立とった。三年も付き合ったのだ。当然、勇人の一方的な話に納得できない紗那は、二度目の挑戦でようやく彼の腕を掴んだ。

「それってどういうこと？」 結婚する予定でお互いの家族にも挨拶あいさつしているのに今更?  
「ああ、それもだ。……うちのお母さんはお前のこと、苦手なんだって。仕事最優先で家庭をないがしろにしそうなタイプは、良妻賢母のお母さんからすると気にくわなかつたみたいだな。確かに言っていることは外れてなかつたし」

「……はあ？」

紗那にとつて今の仕事は、積年の夢を叶えてようやく掴み取つたものだ。それは勇人にも話していたし、一生涯、働き続けたいと結婚の話が出た時に伝えている。そのために結婚するなら家事育児にも協力してほしい、家事は半分手伝つてほしいと伝えていた。それだって家事は苦手だと言い訳をして、結局ほとんど手伝つていないのが現状だ。  
「もしかして、お母さんがそう言つたから、私と別れるの？」

「それもあるけど、それだけじゃない。とにかく俺はお前とは別れたい」

それだけじゃない方の理由が気にかかるんだけど、と言おうとするが、勇人は紗那の顔を見ずに、またちらつと時計に目をやつた。なんで時間を気にしているのか、と思いつ

つつ、紗那是逃げようとする勇人の手をさらに強く押さえ込む。  
「もうちょっと納得できるように説明してよ。家事分担が気にくわないのなら話し合えばいいじゃない。そうじやなくてなんで、いきなり別れ話にするの？」

紗那が勇人の顔を見て、声を上げた瞬間、勇人は紗那の向こう、店の入り口の方へ視線を向け、あつ、という顔をした。慌てて紗那是後ろを振り向く。

「別れる理由。それはあ……勇くんが私のこと、好きになっちゃつたからです！」  
後ろからかけられた聞き覚えのある声に、紗那是その人の顔を見つめた。すると彼女は紗那の横をすり抜け、勇人の腕に縋りつく。改めてその人物を目の当たりにして紗那是絶句してしまつた。

「……里穂……ちゃん？」

勇人の隣に立ち、その腕に自らの腕を絡めて上目遣いで彼を見上げているのは、紗那の職場の後輩、金谷里穂だった。

「勇くん、ちゃんとと言つてくれました？」 勇くんは里穂と結婚を前提に付き合いた

いから、紗那先輩と別れるんだって」

グロスを塗つた艶々の唇を尖らせて、里穂は勇人の顔をじいつと見つめている。パール味の強いインサイドアイライナーを入れて、うるうるの瞳に見せるんですけど、と里穂がランチの時に紗那に話していたことをふと思い出す。

「り、里穂ちゃん。紗那と二人で話をするから待つてって言つたよね？」

「だつてえ。六時三十分には待ち合わせ場所に来るつて言つたのに、勇人くん来ないか  
らー」

それで時計をチラチラと見ていたわけだ。そもそも紗那との待ち合わせが六時で、三十分弱で別れ話を済ませて、その後デートの予定を立てていた、ということかと紗那是理解する。すうつと脳が冷えた気がした。

「金谷さん、貴女、私が勇人と結婚を前提に同棲しているつて知つていたのに、ちよつかい出したの？」

普段は里穂ちゃんと呼んでいたが、もう親しげに名前を呼ぶ気にはなれない。

里穂と勇人の直接の接点はないはずだ。一度お邪魔したいとさんざん里穂にねだられて、紗那と勇人の住むマンションまで遊びに来た以外には。

（その一回で、連絡先でも交換したの？）

疑問が頭の中でぐるぐる回る。すると里穂は紗那の疑問がわかつていたかのように、嫌な感じの笑みを満面に浮かべて答えた。

「里穂が勇人くんにちよつかい出したわけじゃなく、勇人くんが一度飲みに行こうつて言うから。で。何回かデートしたらどうしてもエッチしたいって誘われて、『本当は里穂ちゃんみたいなタイプの女の子が好きなんだ』って。……あんまりお願ひされるになつて何も言い返せない。

「でね。一回里穂とシチャつたらあ、勇人くんはエッチの下手な女とは結婚したくない、とか言い出して。でも里穂とちゃんと付き合いたいのなら、先輩とはちゃんと別れてねつて言つたんです。当然ですよねー」

舌つ足らずの可愛らしい口調で言いたいことを言うと、里穂は絶句している紗那に向かって満面の笑みを浮かべた。

「紗那先輩。仕事がちょっとぐらいできても、彼氏に振られるとか、先輩も可哀想だなーって思つたんだけどお。でも勇人くんは、エッチが下手な女とは絶対別れるつて言つて。だから里穂のことがなくとも、別れるつもりだつて言うから」

『ねつ』と同意を求めるように勇人を上目遣いで見上げると、彼は余計な事ばかり言う里穂を止めどころか、一瞬眦まぶたを下げて頷き、偉そうに言い放つ。

「まあ、エッチ云々はともかく。お前が自分の仕事ばかり優先したから、気持ちが離れつてこと。もともとお前が俺の事を好きだつて言うから付き合つただけだし。……まあ具体的な結婚話までは進んでなくて良かつた。とりあえずあのマンションは来月末で

俺、出るから。お前もさつさと荷物移動させろよ。……じゃあ、そういうことで！」  
それだけ言うと、勇人は里穂を連れて店を出ていこうとする。だがわざわざ足を止め  
た里穂が振り向き、紗那の顔を見て、小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「先輩って、自分から勇人くんに告ったんですね。里穂は勇人くんから告白されたん  
ですよ。昔つから言うじやないですか。恋愛は惚れた者の負けって」

「そんなあ。じゃあ俺が里穂ちゃんに負けたってこと？」

「ふふふ。どうだと思いますう？」

「いちやいちやと会話を続ける二人は、ショックを受けている紗那の様子をちらちらと  
窺いながら、底意地の悪い優越感に満ちた表情を浮かべている。

「もう、仕方ないなあ。いいよ、俺が里穂ちゃんに負けてあげる」

「勇人くん優しい♡」じゃあ、今日のディナーは勇人くんのおごりでね」

「もう、いつも俺がおごっているだろう？」

「うふふ、そうでしたあ」

紗那があっけにとられている間に二人は紗那の存在を完全に無視して、さつさとその  
場からいなくなり、紗那は片手に持っていた冷めたコーヒーを無意識に飲み干す。その  
まましばらく呆然としたあと、はっと目の前のオーダーの紙を見つめて、超現実的なこ  
とに気づいた。

「勇人……自分の飲んだコーヒー代すら払わずに行つた……」  
その瞬間、同棲していた婚約者に振られ、思い出の喫茶店に、一人置いていかれたこ  
とを理解する。

「……つてもう、元、婚約者……か。ホント…………最低」

ぐしやりと髪をかき上げて、お腹の奥底から込み上げる毒を吐き出すように、深々と  
溜め息をつく。今自分に起きたことが現実だと信じたくない。だが、目の前に残された  
二人分のコーヒー代が書かれた伝票を見て、結婚を約束していた相手に他に好きな相手  
ができるて振られたこと。しかもその相手が職場の後輩だったという衝撃の事実が、じわ  
りと脳裏に染みてくる。

頭は冷たくて、何故か腹の中だけがグツグツと熱い。  
(エッチが下手だと、なんだつていうのよ！)

「……情けなくて、涙も出やしない」

振られた理由がくだらなすぎて、悲しさより怒りが込み上げてきて、紗那はようやく  
立ち上がることができた。  
そうして潰しそうな勢いで伝票を握りしめ、そのまま喫茶店のレジに向かつたの  
だった。

## 第一章 辛辣上司の意外な横顔

とりあえず喫茶店を出て、道を歩きながら同期入社の親しい友人に電話をする。

「ねえ。京香、どうしても聞いてもらいたい話があるんだけど、これからちょっと付き合つてよ」

『……私、今帰社途中で、その後定例の部内の飲み会があるから無理なのよ。本当にこめん。週明けに必ず付き合うから!』

電話先の同僚、松岡京香は申し訳なさそうに言つて、紗那の誘いを断る。

「……そか。わかった。じゃあ月曜日、時間空けてよ』

『了解。週明けにいつもの店の個室でランチ予約しておく。それで足りないようなら、夜も時間取れるように調整するから』

「ありがと。じゃあ仕事頑張ってね』

相手に気づかれないようにそつと溜め息をついて、紗那は頷いて電話を切つた。

たとえ親しい友達でも、どうしても時間を割いてもらえないことはある。たとえそれが婚約者に振られた夜でも。

(仕事中に電話でそんなこと言つたら困らせるだけだしねえ。仕方ないか)

けれどあんな風に振られてしまい、勇人と過ごした家に戻る気も起こらず、紗那是そのまま一人で二軒ほど飲み歩いた。

(なあにが、『エツチが下手だから』だ。そんなにエツチが大事かつ。……ちゃんと私と別れ話をせずに、二股みたいなことして。あんなに節操がないって知らなかつた。あの女も、あれだけ私に仕事のミスを押しつけておいて図々しい。……きっと、結婚する前にわかつて良かつたんだよね)

そんな風に自分に言い聞かせる。気づくと帰巣本能のように馴染みのバーに足が向いていた。

駅を挟んで会社の反対側にあるその店では、会社の人間と鉢合わせしたことがない。そもそも繁華街から住宅街に入る手前について、目立たない店なのだ。大概の人はそんなところにバーがあるとは気づかないだろう。美味しいものに目がなくて、店探しを趣味にしている紗那が、会社周辺を探索して偶然見つけた、カウンターしかない小さな店だ。

「こんばんは。酔い覚ましに軽めなやつ、何か作つて

カランとドアベルの音を鳴らし、モノトーンのシックな内装で統一された店内に入り、カウンター前でシェーカーを振るバーテンに声をかける。ふらふらとした足取りでカウ

ンター席に向かつた。どうやら夜も遅いため、客は紗那以外には一人しかいないらしい。仕立ての良いシックなスーツの背中をちらりと見て、少し引っかかるを感じながら、紗那是その客の一つ離れた席に座つた。

「和泉さん？ こんなところで珍しいですね」

あまり話さないバーで、テンドラーが小さく頷いて何かを作り始めたのと同時に、横あいから声をかけられて、紗那是ハッと隣の男の顔を見上げた。

「……渡辺室長？」

思わず素すっ頓狂な声を上げてしまった。

（会社の人が来ないからこの店の常連だったのに、なんどよりもよって、この人がここにいるの？）

一つ空いた席の隣に座っていたのは、商品企画室長である渡辺隆史だ。こんな時に直属の上司と会いたくはない。だが入店と共にカクテルをオーダー済みだったから、回れ右して帰るわけにもいかない。酔いを醒ましたら早々にここから退散しようと、そう思っていたのだけれど……

「そりや頭にくるな！ その女も大概だ」

「ですよね。私もさすがに切れました！ あんな男、こっちから捨ててやる！」

酔つ払うと隆史は碎けた口調になる。それにいつもに比べて饒舌で、意外にも人の愚痴を聞くのが上手い。紗那是酔つ払った勢いのまま、勇人との出会いから、つい先ほどまでの別れまでの話を、隆史に滔々と語っていた。ただしエッチ云々の話と、相手の女性の名前は伏せたままだ。一応同じ課内の人間だから余計な話をすれば、仕事にも支障が出るだろう。

「そんな不誠実な男、さつさと見限つてしまえ。別れて大正解だ」

「ですよね。私も今、心からそう思つてます！」

そう勢い良く叫んだ後、それでも自然と漏れてしまうのは溜め息だ。

「……ところで。渡辺室長自身は最近、どうなんですか？」

これ以上ゲチゲチ言うのも嫌になり、話題を変えるため軽い気持ちで相手の状況について聞いてみる。

「…………」

だがその瞬間、隆史は黙り込んでしまった。軽い気持ちだったが、地雷だったのだろう

うかと、チラリと上司の表情を確認する。

「あの……」

「…………」

伏せがちになつた目を隠すように長い睫毛<sup>まつげ</sup>が影を落とす。

容姿が良いとは思つていただけれど、今までじつくりと見たことがなかつた彼の、冷たい印象の目鼻立ちが、思つていた以上に整つてゐることに気づいてドキリとする。

「出でいかれたつて……彼女に、ですか？」

「…………」

（こ、これ、思い切り地雷踏んじゃつた？）

うつかり深掘りしたことを後悔する。

こんな時間まで飲んでゐるのだ。紗那同様忘れないことがあるのだろう。けれど仕事場では冷静で、冷淡な印象だつた隆史だが、自分と同じよう恋愛したり、落ち込んだりもするのだと、意外に思つてしまつた。改めて近くで彼の顔をよく見ると、目の下に薄く墨を刷<sup>は</sup>いたような隈があつた。

（もしかして、あんまり眠れていないのかな……）

仕事をしている時は、隙がないから全然そんなこと気づかなかつた。そう考えながら彼の話に耳を傾ける。

「このところ忙しかつたから、あんまり構つてやれなくて……三年も一緒にいたのに、突然出ていつたきりだ……」

そう言ふと、彼はグラスの酒をあおる。つられて紗那も目の前に出された軽めのカク

テルを一気に飲み干してしまつた。

「わかります。なんか空<sup>むな</sup>しいですよね。……そうです、そういう時は飲みましょう！私も飲みますから。バーテンさん、私にバラライカください！」

酔いを醒ます予定が、追加でウォッカベースのカクテルをオーダーしていた。そんな紗那を見て、隆史も飲み倒そうと思つたのだろう。カクテルではなくてウイスキーのロックを頼む。

「では、今宵<sup>こよい</sup>の出会いに乾杯！」

会社での顔と全く違う、柔らかな表情で隆史がグラスを上げる。芝居<sup>せりふ</sup>がかつた台詞<sup>だいし</sup>に思わず笑いながら、紗那は隆史の琥珀色<sup>こはくいろ</sup>の液体が入つたグラスに、自分のカクテルグラスの縁を合わせた。

「…………すみませんが、そろそろウチの店、オーダーストップで……」

数杯飲んで酔いが本格的に回り、盛り上がりがつてきたタイミングで、申し訳なさそうにバー・テンドラーが声をかけてきた。

「…………じゃあ、ウチで飲み直すか？」

「そうですね。失恋した者同士仲良く飲みましょう！」

思いがけない誘いの言葉に、酔いで深く物事を考えられなくなつていた紗那は、満面の笑みで領いたのだった。

\*\*\*

「う。頭……痛い……」

目を開けた瞬間、朝の光が目を射す。一瞬目を瞑つてから、朝日を警戒しつつ薄目を開ける。

(あれ……ここ、どこだ? )

だが目に飛び込んできたのは見知らぬ光景だ。白くて清潔な空間だけど、どこのホテルだろう。なんでこんなところに泊まつたんだろう。……昨日の夜、何をしてたんだろう、と記憶を想起する。

(けど、なんかずいぶん硬い枕だな……)

ホテルなら羽根枕じやないのか、などと思ひながら、寝返りを打とうとするとギシリ、と微妙にベッドが軋む音がした。そろそろ朝日にも目が慣れただろうと、眉を顰めて時間をかけ完全に目を開く。

(――え?)

咄嗟に口に手を押しつけて、声を上げなかつた自分を褒めてあげたい。

(ちよ、ちょっと待つて……私、本当に昨日どうしたんだっけ?)

隣に男の人がいる。

しかもよく知つてゐる人だ。ふと頭の中に昨日の振られたシーンが蘇る。だが失恋のショックもどこかに飛んでいきそうだ。ベッドの隣どころか、ものすごい至近距離に服を着ていない男性がいる。その上、職場でよく見知つてゐる顔だ。けれど絶対にこんな位置関係で一緒でいるはずのない人。

(え、あの、ちょっと。これ……腕枕?)

妙に硬い枕だと思つていたのは、男性の腕だという驚愕の事実に気づく。

(ヤバイ……よくわからないけど、これ、絶対にヤバイ)

とにかく少し冷静に考えたいと、彼の腕の中から抜け出そうとして、次の瞬間、パチリと目を開けた男と視線が交わつてしまつた。

「あつ……の、そのつ」

何か言い訳をしなければ、と思つた瞬間、腕枕の主、渡辺隆史は目を細めて朝の心地良い目覚めを堪能するかのように、伸びをした。

「あー。よく眠れた。やっぱり腕に重みがあると全然違うな」  
その台詞に紗那は思わず目を瞬かせる。瞬間、頭の中に昨日の夜の会話が蘇ってきた。

『そ、うなんだ。アイツにいつも腕枕をしてたから、いなくなられてから落ち着かなくて、最近はすっかり不眠症で……』

どうやら彼女がいなくなつて以来、隆史は一人で寝ているらしい。いつも腕枕をして寝ていたから、その重みがないと安心して眠れないのだ、と言つてなかつたか。

「そ、それは良かったデスネ」

とりあえず彼の言葉に合う返答をする。すると隆史はにいつと笑つて、紗那の頬を指先で軽く突いた。

「……色々あつたし、よく寝たら腹が減つたな。とりあえず、飯にしよう」

（色々、つて……私、何やつたんですかつ）

その声に慌てて紗那は身を起こす。だが次の瞬間、自分も服を身につけてないことに悲鳴を上げてしまった。

\*\*\*

先にシャワーを浴びてきたら、と言われた紗那は彼の貸してくれたパジャマを頭からかぶり、二日酔いの頭痛を抱えたまま、ふらふらと彼の家の浴室を借りることにした。（つて、よくわからないけど、ここすごく良いマンション、だよね……）

昨日一緒に飲んだバーのすぐ側に自宅があると隆史に言われて、二人で歩いてきた。確かマンションの入り口には広くて綺麗なロビーがあり、そのままエレベーターで高層階へ連れてこられた気がする。

そういえば、二年ほど前に駅から歩いて十分くらいのところに、ハイグレードマンションが建つたと聞いた。ここはそのマンションではないか。

（渡辺室長つて……お金持ちなんだな）

ミナミ食品から出向してきている隆史の給料はある程度想像がつく。いくら有能としても、こんなマンションに住めるような給料はもらつていらないだろう。それにそもそもここは分譲マンションだつたはず。ほうつとしつつ、そんなことを考えているのは、半分頭が現実逃避しているからだ。だがこのまま逃避をし続けるわけにもいかない。（えつと……あの後どうなつたんだっけ？）

シャワーを浴び、広い湯船に身を滑らせ、軽く目を閉じる。手を伸ばしたところにボタンがあるから試しに押してみると、ジャグジーが動き始めた。

「どこの高級ホテルよつ」

思わず笑つ込んだしまつた。

ともかく、昨夜の酒まみれの中から記憶をなんとか抽出しようとする。覚えているのは昨日の勇人の衝撃的な告白と、失礼すぎた里穂の言動。

『エツチが下手な女』という里穂の台詞が、舌つ足らずな音声付きでぐるぐると回る。瞬間、なんとも言えない気持ちが込み上げてきた。勇人と一緒にいた三年間、喧嘩もしたけれどたくさん笑った。同棲し始めてからは、お互い大切なものを一つずつ集めて、二人で生活を築き上げていった。それが結婚に繋がっていくのだと、そう信じて疑いもしなかった。

けれど彼の紗那に対する本音は『エツチが下手だから別れよう』って、そんなものだつたのだ。

『紗那は辛い時にも笑顔でいてくれるから、俺も気づくと笑っているんだ』

（それが……なんでこんなことに……）

一緒にいた時間が楽しかったから、こんな風にしていたら、ずるずると追想の靄に引きずりこまれそうだ。

「ちがうちがう。——そんなことより、渡辺室長と何があつたのか思い出さないと！」過ぎてしまつたことを慌てて頭から切り離す。今朝、目覚めた時にお互いの服を着ていなかつたということは、それなりの何かがあつたのだろうか。

（あの状況だもの。やっぱり……シチャつた、んだよね）

シャワーを浴びる前にちゃんと体を確認すれば良かった。二日酔いの頭ではそこまで

頭が回らず、いつものように先に体を洗つてしまつた。

「……我ながら、最悪つ」

振られた勢いで、他の男の人とシテしまうなんて。それも相手が相手だ。酔つ払つて前後不覚でこうなるなんて、本当に自分が嫌になりそつた。

そもそも部屋に誘われてフラフラついていつた時点で、何があつてもおかしくない。あの時は酔つ払つていてまともな判断ができなかつた、なんて言い訳に過ぎない。しかもその相手が……

（ちょっと苦手に思つていた、直属の上司とかつて……）

なんだつたら、昨日の夜から全部やり直したい。さつさと振られて、里穂の顔なんか見たくもなかつたし、あんな台詞も聞きたくなかつた。酔つ払つても適当なところで帰宅して、直属の上司とややこしい関係になんてなりたくないなかつた。

そんなこんなを考えているうちに、熱が込み上げてくる。いや、ジャグジーで心地良く温まつたつていう物理的な理由もあるかもしれないけど。

（とにかく、これからどうしよう）

そう決意した瞬間、ふっと脳裏にフラッシュのように記憶が過る。

『そんな奴のために泣くな。俺が……忘れさせてやる……』

『耳元で囁かれた言葉。熱っぽい吐息。熱を帯びたその人に、泣いたまま抱きしめられたこと。

断片的な記憶が蘇る度にカツと全身が熱くなる。

優しく触れる指先と、唇。

彼はどんなつもりでそんな言葉を口にしたんだろうか。わからない……けれど。

「アレは夢の中の出来事。とりあえず……もういい加減、お風呂から出ないと」

風呂を出て、お礼を言って、素早く立ち去る。

何もなかつたふりをして、月曜日からまた今までのよう、上司と部下として同じ

チームで仕事するのだ。中途半端な関係で、大切な仕事に支障をきたしたくない。

パシン、と自らの頬を叩いて気合いを入れ、はつと息を吐き出して浴槽から立ち上がる。どうやらお湯に浸かりすぎたらしい。軽く立ちくらみがして、壁に触れて体を支

える。

お風呂を出て、着替えていると、扉の向こうから声がした。

「朝飯、作ったから」

その言葉に、逃げ出す作戦が失敗したことに気づき、紗那はタオル一枚のまま、頭を抱えた。

\*\*\*

呼ばれてリビングに向かう。既に食事の支度はできていた。リビングに繋がるダイニングはオープンキッチンがあり、どつしりとした木製のダイニングテーブルには美味しそうなパンが何種類かと、チーズにハムにサラダ、ゆで卵まで用意してある。

ダイニングから見るリビングは、窓が大きくて外からの採光が良く、広くて明るくて、とても良い雰囲気だ。だがカーテンがタッセルでまとめられている横に、ちょっと変わったオブジェのようなものがある。

(あれ、なんだろう……キヤットタワーみたいな感じだな)

猫を飼っていた友人の家に似たものがあった。猫は高いところから下を見下ろすのが好きなのだと友人は言っていた。ふと友人の家の窓際にあるキヤットタワーの上から外をぼんやり見ていた猫の姿を思い出す。ただ、この部屋に猫がいる様子はない。

(昔飼つてたとか、かなあ……)

一瞬、猫について聞こうとして、昨日地雷を踏んで失敗したこと思い出出す。  
 (元彼女さんの飼い猫だつたりしたらややこしいし……何も聞かないでおこう)

そんな風に紗那が一人で納得していると、不思議そうな顔をした隆史に声をかけられた。

「まあ座つて。まずは朝食を食べよう」

その声に慌ててダイニングエリアに腰かける。一枚板を使つたテーブルにはシンプルなチエアが四脚あるが、新品同様で多分、来客がある時以外は使われていない感じがした。ちなみに使っていないのももつたらしいほど、座り心地が良い。

「ではいただきます」

隆史が手を合わせるのを見て、紗那も手を合わせる。カフェオレに手を伸ばしたところで、彼はブラックコーヒーを飲んでいることに気づいた。

(……なんで私のところにはカフェオレなんだろう? :)

口をつけると、深煎りの濃いめのコーヒーに温めた牛乳を合わせたらしく、砂糖は入っていない。

(これ、私の好きな感じのカフェオレだ……)

「あの……」

彼はコーヒーを飲みながら、何故か紗那の顔を見て柔らかい笑みを浮かべている。

「なんで室長はブラックで、私はカフェオレなんですか?」

「なんでって……紗那さんはカフェオレ好きだろう?」

当然のように今まで呼ばれたことないはずの下の名前を呼ばれて、紗那は思わず目を見開く。驚きすぎて、一瞬何を聞こうと思ったのか忘れそうになる。

「えっと、あの……。あ、そうだ。私カフェオレ好きなんて……言つてましたつけ?」

「……いつもコーヒーは『ミルク多め、砂糖なし』って言つていただろう? まとめてコーヒーをテイクアウトしてもらった時は、カフェオレ砂糖なし、だつたしな」

曖昧に笑つた彼は重ねて紗那に食事を勧める。正直食欲はないけれど、用意しても

らつているからには手をつけないわけにはいかないだろう。紗那はフォークを手に取り、サラダを口に運ぶ。シャクリと噛むと新鮮な野菜の甘味にドレッシングがほどよく絡む。

「んつ……これ、ドレッシング美味しいですね。ミナミ食品ホームメイドシリーズの、にんじんドレッシングですか? でも歯ごたえがちよつと違う。何か加えて……あ、これナツツですね……」

顔を上げて隆史を見つめると、彼は目を細めて嬉しそうに笑う。

「さすが紗那さん。……ローストしたクルミを足しているんだ。歯ごたえが良くなるし、風味もいい感じだろう?」

シャクシャクとしたサラダに、にんじんの甘味とビネガーの酸味が美味しいドレッシ

ング。それにナツツの香ばしさと歯ごたえが加わって、レベルアップした美味しさになつてゐる。酒の酔いが抜けていなかつた体に、野菜のフレッシュな感じが染み渡つてきて心地良い。

「……室長つて、味覚のセンスがいいですよね」

「……この期に及んでもまだ室長、か……」

ぼそりと何かを呟く隆史だが、聞き取れなかつた紗那が首を傾げると、息をついて、笑顔で返してきた。

「……どうせ食べるなら旨い方がいいだろう? 僕は基本的に享楽主義者なんだ」

何かを誤魔化すように彼はそう言うと、旺盛な食欲を見せつけるように食事を続ける。「享楽主義者つて……言い方があれですが。でもほんと、昨日あれだけ飲んだ割にしつかり食べますね。気持ち悪くないんですか?」

「……ああ。紗那さんは……昨夜はそうとう飲んでたから一日酔いだろ? 僕は酒に呑

まれるほどは飲んでない」

すっと目を細めて、隆史はからかうように笑う。恥ずかしさにじわりと熱が込み上げてきた。

(そうだ、大事なことを言わなければ)

「あの、室長。……昨夜のことは申し訳ありませんでした。……全部、忘れてくだ

さい」

必死の思いでそう目の前の上司に向かつて言う。うつかり直属の上司と不適切な関係になつてしまつたのは、自分としても予定外なのだから。

(しかも何があつたのか覚えてない辺り、本気で最悪だよね)

だからこそ、なかつたことにするために、少なくとも『忘れる』という言質を取るまでは交渉を続けないといけない。

だがそんな紗那の思いをよそに、隆史は唇の端を歪め、笑顔のような形だけ保つて、けんもほろろに言葉を返す。

「悪いが、俺は酒に酔つても記憶はなくさないタイプでね」

「そこつ! ……忘れるのが、男の優しさじゃないですか?」

「俺はそんな都合のいい記憶力は持つてない。それに昨日は正体を失くすほどは酔つてない」

飘々と言ひ返されて、フォークを持つ手が震える。紗那是昨日の酔態はほとんど覚えていないけれど、『エッチが下手』と叫んだ記憶はうつすらあるのだ。きっと碌なことをしていない自信がある。絶対に忘れてもらった方がいい。

だつたら彼がわざわざ『正体を失くすほど酔つてない』と言つたのは、どういう意味だろうか。ふと昨日のベッドでの光景が脳内にフラッシュ映像のように蘇つて、かつ

と体の熱が上がってくる。

「……お願いですから、忘れてください！」

再度声を荒らげて言うと、彼はムツとしたようにサラダのミニトマトにプスッとフォークを突き刺した。それを持ち上げて、紗那の目の前に差し出す。

「……なんですか？」

「それなんだが……忘ることはできないが、黙つておくことはできる」

つまり色々あつたことは覚えているけれど、それを人に言わないでおくつもりはある、ということだろうか。さすがにそれは脅迫でしようか、とまでは口にできない。

「……では、昨日あつたことは黙つておいてもらつてもいいですか？」

まずはそこが大事だ、とばかりに紗那は隆史に念押しをする。すると彼はニヤリ、と悪そうな笑みを浮かべた。

「そうだな、なら条件をつけさせてもらつてもいいか？」

(つて、やっぱり脅迫かあああ)

だが完全超人みたひな隆史から見てメリットのある条件なんて、自分に関係するもので何があるんだろうか、と思う。

(昨日みたいな関係を継続的にとか言われたら……さすがに引くけど、渡辺室長、めちゃくちやモテるし、それはないか)

首を傾げつつ、相手の出方を探る。

「……条件って、どんな条件ですか？」

「昨日、話したと思うんだが、一緒に寝てくれる奴がいなくなつて、他にも色々気になることが多くて、このところずっと不眠症だつたんだ。だが紗那さんが腕枕で寝てくれたせいか、昨夜はぐつすり眠れた。こんなに眠れたのは数ヶ月ぶりでね」

「……はあ」

確かに不眠は辛い。昔ストレスで眠れなかつた時期があつたからそれはよくわかる。  
〔確かに「住むところもなくなつちやう」つて愚痴った記憶は……ある。けど、何を条件にするつもりなんだろ。この人〕  
じいっと相手の様子を窺うようにして視線を向ける。すると彼は悪びれず、にっこりと笑顔を返してきた。

「なら、ここに住んだらいい」

「……は？」

何をこの人は言っているんだろう。思いつきり眉を顰めた紗那の反応は予想通りだつたのか、彼は驚きもせずパンを口に放り込む。それを咀嚼し呑み込むと、一口コーヒーカップを飲んで一人で頷いた。

「俺は不眠症で困っている。紗那さんは住む場所がなくなるので困っている。……（）まではいいな？」

何が、いいな、だ。むむむと眉根を寄せると、彼はもう少し丁寧に説明する気になつてくれたらしい。

「ここは分譲の家族向けのマンションだから、部屋数はそれなりにある。通勤には近くで最適だし、家主が不要だと言つているから、家賃を払う必要はない」

言つてのことの意味はわかる。だが、条件を何にしようとしているのかがわからないうから不安なのだ。

「その言い方だと、住むところがなくなるなら、家賃なしでここに住んだらいい、つて言つてているように聞こえるんですけど？」

思わずそう尋ねると、彼は真顔で頷く。

「ああ、そういう意味だ。……昨日のことは他の人間には黙つておるし、家賃も不要だから、紗那さんにここに住んでもらいたい」

……それはそれは良い話に聞こえるけれど、『条件』がついてくるのだろう、と紗那

は頷かずに続きを促すように彼の顔をじっと見る。

「……その代わりと言つては、弱みにつけ込むようであれだが……」  
（やつぱり条件があるんだ。しかも弱みにつけ込むようなのが……）

「…………」

なんですか、と問うかわりにじつと見つめている紗那の視線から、隆史は困った表情を浮かべたまま目をそらす。普段飘々としている彼らしくない。

「紗那さんには、ここに住んでもらつて、俺が頼んだ時には、俺の腕枕で寝でもらいたい」

「…………はあ？」

変な声が出てしまつた。それは……最初考えた、女性として男性を慰める的な下衆な提案かと、思いつきり顔を顰めてしまつた。

「いや、あの…………そういう意味じゃなくて……」

紗那の表情を見て、疑われたと思ったのか、隆史は慌てて首を左右に振つた。

「違うんだ。別に性的な云々って意味じゃなくて。普通に添い寝？的な。本氣で眠れなくて参つているんだ。先週も毎日二時間以下の睡眠で、正直体力を保たせるのが限界で……。仕事のクオリティが下がつて仕方ない。すまない。変なことを言つてているのは重々承知している。だが……俺を救うと思って、この条件を呑んでくれないか」

今まで飄々としていた彼に、何故かいきなり両手で押まれてしまつた。そのくらい切羽詰まつているのか。

職場での彼の様子とのギャップに思わず気が抜けた。そういえば、昨日の夜、間近で隆史を見た時、目の下に隈を作っていたことを思い出した。

「あの……添い寝だけですか？」

「ああ、別に性欲がないわけじゃないが……今は不眠を解消するのに手一杯で、それは後回しでいい」

あ、そつちはナシじやなくて、とりあえず後回しなんだ。確かに睡眠とか食欲が満たされないと、人は性欲が湧かないと言った覚えがある。とはいっても満たしてしまつたんじやないかって気もしないでもない。しかし、逆に言えば睡眠に対する欲求は、それだけギリギリのところなのだろう。

紗那は一瞬どうしようか迷う。実のところ、今隆史を中心としたチームでの新企画は、佳境を迎えているのに、ここ最近隆史が精彩を欠いているな、とチーム全員で話していた。

(室長のリーダーシップがチームにとつて必要不可欠、なのは確かだし。私も来月上旬までゆつくり家を探している余裕はない)

昨日だって、忙しい中、なんとか時間を作つて勇人に会いに行つたのだ。結果は……

「……そこまで、寝不足が辛いんですか？」

思わずそう聞き返す。  
 「……ああ、ほんとうに寝不足は堪える  
 ぼそりと呟くと、ちらりと紗那の方を見て、もう一度深々と溜め息をついた。  
 「夜は眠れない、ようやく寝付いてもすぐに目が覚めてしまう。目が覚めると色々考えすぎて、また眠れなくなる……。こんなことで悩んでいる自分がみつともないやられ情けないやら……」

普段、冷静沈着でスマートに仕事をしている姿しか見ていないし、仕事場ではオシャレに整えられた髪型だから、寝起きでちょっとぼさつとしている頭をぐしゃぐしゃとかき回す姿に、寝不足が堪えている感が強まる。

「わ、わかりました。確かに私も住むところには困つていたので……。先ほどの約束を守つてくれるなら、次の家が決まるまではこちらに滞在させてもらいます」

43 農場上司の極上包囲網～失恋したての部下は、一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。～

(可哀想に、よっぽど寝不足が堪えていたんだな……)

思わず同情した紗那だが、次の彼の言葉に絶句してしまった。

「じゃあ飯が終わり次第、早速紗那さんの部屋に、荷物を取りに行こうか」

「……は？」

突然の提案に口をあんぐり開けた紗那を見て、隆史はにんまりと笑みを浮かべた。

「元彼が戻ってくる前に、荷物を移動させた方がいいだろ？ 少なくとも今すぐ必要な着替えとか、そういうやつ。車を出すから今から取りに行こう」

そう言われて、呆然としている間にお皿を下げられて、気づくと家に向かうことになっていた。

## 第二章 急転直下、激動の週末

万が一、勇人と鉢合わせしたらどうしよう？ と心配しなくもなかつたが、マンションに戻っているだろう紗那を気遣つてか、勇人の姿も里穂の姿もなくて、正直ホッとする。

(さすがに、不在だからって部屋に金谷さんを連れ込まれてたら、確実に胃の中のもの、

全部吐きそくな気がするわ……)

「着替えとかは自分で準備するだろ？ 他に大きなもので持つていきたいものはないか？」

そう言われて、部屋をぐるつと見回す。結婚してからそろえようと、あまり家具を買ってなかつたのは不幸中の幸いかもしれない。

「私が一人暮らしの部屋から持ってきてたのは……」

お気に入りの一人掛けのソファーや、小さな食器棚、一人暮らししてから買ったちょっと贅沢な調理器具や、オープンレンジなどを指し示す。

「このうち、持つていきたいのはどれ？」

「え？ 今ですか？」

思わず聞き返すと、彼は眉を顰めて紗那の顔を覗き込んだ。

「その新しい彼女とやらが来て、あれこれ触られるかもしれないだろ？」

そう言われた瞬間、その光景をありありと想像してしまつてブルッと体を震わせた。

「そう考えたらできる限り、今すぐ持つていきたいですね」

咄嗟に答えると、彼はそうだろう、と言わんばかりの顔をして頷いた。

「じゃあ、全部持つていこう。部屋には余裕があるから、一部屋は紗那さんの家具とかの保管に使えばいい。あと、紗那さんは自分の着替えなんかをまとめてくれ」

さらつと言われて再び周りを見回す。

「全部持っていくってどうやつて……？」

隆史が乗せてきてくれた車は外国製の高級セダンだ。こここの家具を積める程の大きさはない。

「ああ、業者に連絡する」

なるほど、と一瞬納得しそうになり、慌てて紗那は首を横に振る。

「ちょっと待ってください。それって完全にこの部屋を引き払うみたいに思えるんですけど？」

「だからそのつもりで来たんだが？　またこの部屋に来たいか？」

「いや、来たくはないんですけど……」

失恋直後に、同棲解消のために二人で暮らした部屋で荷物をまとめる、なんて一人でやつたら果てしなく落ち込みそうだし、そもそも昨日だってこの部屋に一人で戻るのが嫌で、夜遅くまで飲み歩いていたようなものだ。

「ああ、運送費の支払いについては俺がするから安心してくれ」

「え、ちょっと……引っ越し費用なら、当然私が払います！」

「仕事で付き合いのある業者に頼むから、こっちでする。とにかく何度も来たくないのならさつさと準備を整えてこい。三時間後に車が来るよう手配するから、俺に触れら

れたくないものはそれまでに準備してくれ

そういうえば隆史は仕事で方針を決めるとき行動がモットーで、建設的な提案であれば手を止めて聞いてくれるが、意味なく躊躇しているだけなら叱り飛ばされるのだ。

「はい、了解しました！」

言い方は少しも強くなかったが、叱咤されたような気分で、思わず背筋を正してそう答えると、紗那は慌てて部屋に戻り、衣類や他の持っていくべきものを整理していく。

それこそ隆史の住んでいるマンションとは比べものにならないほど狭く、リビングダイニングと、ベッドルームがあるだけの部屋だったけれど、紗那は一瞬手を止めて部屋の中を見回す。

「安いお店で買ったカーテンだつたけど、結構お気に入りだつたよな……」

二人で量販型の家具店を回って、ちょっと値引きしているカーテンを買った。その時ベッドと寝具も一緒に買つたんだつけ。二人で一緒に眠れるように買つたセミダブルベッドにちらりと視線を落とした瞬間、ベタベタしていた里穂と勇人の姿を思い出し、ぐわっと胸に嫌なモノが込み上げてくる。

「もう、ちゃんと畳まなくてもいいや」  
三時間でこの部屋から引っ越しかしないといけない。時間がないから余計なことを考

黒いゴミ袋に、どんどん自分の服を入れて運び出す。時間に追われて体を動かしたせいだろうか。普通の失恋だったら感傷的になるかもしれないのに、されたことを思い出すと怒りのほうがずっと強い。

リビングに荷物を移動すると、隆史は紗那が指示した家具から皿などを引っ張り出していた。

「コレどうする？ 持つていくのか？」

そう尋ねられて、友人からもらったものとか特別に思い入れのある物以外は、おそらくの茶碗やコップも全部置いていくことにした。その後、持つしていくもの、捨てるもの、置いていくものの選別を行う。まだ引っ越ししてから二年ほどであつたし、大きな物はそれこそ結婚してから買うつもりだったので、引っ越し準備には思つたほど時間がかからなかつた。

三時間弱で荷物をまとめ終わると、隆史が手配した業者がさっさと荷物を下ろしていく、感傷に浸る暇もなく荷物を積む。そして今度は隆史の自宅に戻つた。

「ああ、そっちの荷物はこここの部屋に……」

彼の自宅で荷物の置き場所を指示する隆史の様子にもう何も言えなくなり、呆然と見ていると、業者の人たちは荷物を空いている部屋に収めてさつさと帰つていった。マンションは多分なくなつただろう。運び込まれた荷物を見て、紗那ではなく、何故か隆史がすがすがしい笑みを浮かべる。

（――あ、嵐みたいだつたなあ……）

気づくと、紗那と勇人の住んでいた部屋にあつた、紗那の大変なもののはすべて隆史のマンションに収められていた。荷物を取りにいくという目的では、前のマンションに行く必要は多分なくなつただろう。運び込まれた荷物を見て、紗那ではなく、何故か隆史がすがすがしい笑みを浮かべる。

「これでよし。さて、夕食どうする？ なんか食べに行くか？」

そういうえば、そろそろ日が暮れてくる頃合いだが、遅いブランチを取つて以来、何も食べてない。声をかけられた瞬間、どつと疲れが出てきて眩暈がしてくる。

「つと、大丈夫？ 二日酔いのあと、そのまま引っ越し作業までしたからな。無茶させ悪かつた。……疲れているんだつたら、食事は持つてきてもらうようにしてようか」足元がふらついた紗那を隆史が咄嗟に支えて、リビングのソファーに座らせる。持ってきてもらつた冷たい水をちびちびと飲んでいると、夕食のメニューについて相談され、適当に頷いていたら、デリバリーで届けてもらうことになつっていた。

（強引なんだか、親切なんだかよくわからないな……）

テキパキと動く隆史をぼうつと見ていると、自分でも不思議な気持ちになる。

当然のように再びお邪魔しているが、この家は昨日の今頃までは存在すら知らなかつたし、なんだつたら昨日、結婚まで考えていた男性から振られたばかりだ。

「……実感がわからないな」

まるで夢でも見ているような気分になる。

（そうだ。荷物引き上げたって、勇人に連絡だけでもしようかな……）

スマホを取り出す。もしかして昨日のあれこれは嘘だつたんじゃないか、勇人からメッセージが来ているんじやないか、どこかでそんなことを期待しつつ画面を覗き込む。（あ、なんか通知来てる）

慌てて開くが、それは同僚の京香からで、「大丈夫？ 電話で話をしようか？」と気遣つてくれるメッセージだった。

そして勇人からは何一つ連絡が入っていない。最後の会話は昨日の喫茶店の待ち合わせ前にやりとりしたものだけで、しかもその内容は、改めて見ると、紗那が色々とメッセージを送っているのに、スタンプや、『了解』程度の素っ気ない返事しかない。

（そういうば、このところそんな感じだったかも……）

元恋人の心変わりにも気づいていなかつたんだ、と落ち込んでメッセージを送る気力すら失っていると、出前が届いたらしく、隆史がダイニングテーブルの上に料理を並べ

## 立ち読みサンプル はここまで

始めた。慌てて立ち上がり、彼の手伝いをする。

「美味しそうですね……」

蒸籠がいくつも並んでいる。中華にすると言つていたのだけれど、どうやら点心を中心

に頼んだらしい。ごま油とショウガの香りが漂つて、ぐうつとお腹が鳴る。

昨日の今日でお酒は避けようと思つてくれたのか、大きな急須に入っているのは中国茶だ。おろいの小さな湯飲みに、お茶が注がれる。

「次の『贅沢チルド』シリーズだが、点心を中心とした中華料理はどうかと思つていい……。紗那さんの意見を聞かせてくれないか？」

まるで仕事の話のようで、きつと余計な気遣いをせずに食事ができるようにしてくれているのだろう。紗那は有り難く箸を取つて、食事を始めた。

「……冷凍の小籠包は色々なメーカーが出していく人気ですけど、レンジ調理で食べられるものだと、皮が美味しい状態で提供するのはなかなか難しそうですね……。蒸籠で蒸すのだと手間がかかるし……」

皮がしつかりしていて、匙で口に運ぶまでスープが漏れない。スープを包んだもちもちの皮を楽しみ、口に入れた途端に溢れ出す熱々のスープと小籠包に舌鼓を打つ。

「——つあ、ふ……おいひい……」

熱くて舌つ足らずになつた紗那の口調に、隆史がぶはつと笑い声を上げる。仕事場で